〈研究ノート〉

森鷗外と中国文化
——その漢詩から見て

陳　生保

はじめに

森鷗外は、生涯中国文化と深いつながりを持っていたと言える。

鷗外は五歳の時からすでに『論語』の素読を受けている。そして、十歳、父に従って上京するまで田舎の養老館でいわゆる四書五経、左国史漢のたぐいの漢籍を勉強した。上京後も漢籍、漢文、漢詩の学習をつづけていた。はじめは同じ向島の隣近所に住んでいた竹馬の友の伊藤孫一といっしょに勉強したが、のちに明治時代の著名な漢学者である依田学海に師事し、彼に漢文を学び、その添削を受けるようになった。こうして漢学や漢文に関する基礎がための勉強がしっかりしていたからこそ、鷗外は漢文で日記をつけ、文章を書く能力を持つことができたのであろう。

ちなみに『鷗外全集』には漢文四十九篇と漢文で書かれた日記五部が収められている。そして大正七年元旦から大正十一年七月五日、つまりその逝去の四日前までつづいた、四年七ヶ月余りにわたる最後の日記『委蛇録』は漢文によるものであった。このことからも鷗外と中国文化との深いかかわり合いの一端が窺えるように思われる。

鷗外には、あわせて二百二十四首、千五百八十五行の漢詩が現存している。制作の時期からいえば、大学卒業前後、つまり明治十三年元旦から明治十七年までの五年間、計六十一首、主として『北游日乗』と『後北游日乗』にあり、留学時代の四年間、六十九首、主として『航西日記』『獨逸日記』『還東日乗』に収められている。中・壮年時代、つまり留学より帰国した翌年から大正三年までの二十六年間、計三十三首あり、そして晩年、つまり引退を表明した大正四年から世を去る前年の大正十年までの七年間、計六十一首ある。

鷗外の漢詩の師といえば、啓蒙の師は伊藤孫一であり、正規

教育の師は佐藤応渠である。そして、中・壮年時代の師は横川徳郎であり、晩年の師は桂湖村であると思う。鷗外は生涯漢詩を学び、作ったのである。

鷗外は漢詩のすべての詩型を使って作詩を試みたと言える。現存する鷗外漢詩には、四言古詩、五言古詩、七言古詩などの古体詩もあれば、五言絶句、七言絶句及び五言律詩、七言律詩などの近体詩もある。そのほかに、長短句ともいわれる詞もあり、日本の狂詩のような打油詩もある。多種多様な詩型の中で、鷗外の一番長じているのは、七言絶句、七言律詩及び五言古詩、この三つの詩型だと思う。

鷗外の漢詩は、題材も豊富多彩である。彼の詩には、紀行、記事、人物品評、詠物、懐古、抒情、言志、懐旧、悼亡、宴集、応酬、贈答、餞別、応制、君臣唱和、書画題記などのものもあれば、議論、論戦、諷喩などのものもある。まさに古今東西、森羅万象が詠じこまれている。

鷗外漢詩の全体的な特徴はなにか。それは漱石の漢詩と比較してみればはっきりわかる。漱石の詩は主として自我または人生に対する思索であり、日本近代詩の正統を漢詩の形で貫いたものだとも言える。つまり、漱石の漢詩は主観的であり、日本的である。それに対し、鷗外の漢詩は、社会の現実と緊密な関係をもつ中国詩歌の正統精神に近いものである。つまり、客観的であり、中国的である。二人の詩には、特徴の違いこそあれ、二人とも第一級の漢詩人であることには変りはないと思う。

私の考えでは、鷗外文学は三本の柱から成っている。それは日本文学、西洋の近代文学と漢文学、つまり中国の古典文学であるが、なかでも漢詩文による漢文学は鷗外文学の土台であり、出発点でもあった。実際のところ鷗外の文学創作活動は青年期の漢詩文の制作からスタートしたものだと言える。

ところで、鷗外と中国文化とのつながりを全面的に論ずるには、その漢詩文及び中国の古典にもとづいて創作した歴史小説「魚玄機」と「寒山拾得」などが研究の対象になるばかりでなく、その他のすべての作品を検証しなければならないだろうが、対象の巨大さとスペースの制限でとても出来ず、今回はとりあえずその漢詩に限って鷗外と中国文化とのつながりのアウトラインを描いてみたいと思う。

中日両国間の文化交流は二千年の長きにわたっていると言われている。本稿の用例として上げている詩語の中に、鷗外がその出所の古典から直接学び取ったものなのか、それとも、長年の交流の堆積として日本知識層の教養になっているものなのか、判別のつかないものも一部あるが、しかし、いずれも結局は中国の古典に来源するものなので、敢えて用例として使うことにした次第である。

一、中国古典経史の素養

鷗外漢詩を研究していると、いつもその造詣の深さに驚かされる。なぜなら、彼の詩に使われている詩語、典故から見て、

鷗外は中国の代表的な古典経史のほとんどを熟知していると言えるからである。

次に、それぞれ一、二の例を挙げて、その一斑を窺ってみよう。

成敗當年歸一夢　成敗　当年　一夢に帰し
寒烟漠々鎖荊榛　寒煙　漠々として　荊榛を鎖す
誰圖邊海龍驤客　誰か図らん　辺海　竜驤の客の
又作廟堂豹變人[四〇](1)　また廟堂の豹変の人と作らんとは

右は、『後北游日乗』に収められた詩で、函館の五稜廓を参観したときの懐古の作である。第三句の「竜驤」は、中国古代の海軍を司る将軍の官名だが、「竜驤の客」で幕末の海軍高官榎本武揚をさす。榎本は、五稜廓の合戦で官軍に降伏し、維新後また高官になった人物である。第四句の「豹変の人」も、また、同じく榎本武揚をさす。

ところが、「豹変」という言葉は、『易経』の「君子豹変」から来ている。「君子豹変」とは、もともと、君子が過ちを改めて、善に移ることがきわだってはっきりしている、という意味だが、鷗外の「豹変人」は、榎本武揚の政治的急変ぶりをいったものであろう。

『易経』は、易、または周易ともいう。儒学の基本的経典としての五経の一つであり、万物の変化と倫理の関係を説く古典である。これは、きわめて難解な本だが、また、奥行きの深い、包括しないものはないと言われるほど広大な内容をもつ書物でもある。五経のトップに堆されているゆえんである。

君不見　君見ずや
曰午曰馬乾之象　午と曰い馬と曰うは乾の象
由來健行不敢遲[一〇三]　由来　健行敢えて遅からず

これは、留学時代、午日午時（二日のお昼の十二時）に生まれた友達の子供の誕生日を祝う詩から引いたものである。印をつけた「乾」「健行」は、いずれも『易経』の「乾卦」から来ている。乾とは、天・日・天子・男・父など陽の気のものを象徴する。その反対が坤である。「健行」は、堅実で強い意だが、ここでは、子供が、健やかにそだつ意で、『易経』の「天行は健なり。君子以て自ら強めて息まず」をふまえている。ちなみに「自彊不息（自ら強めて息まず）」は、鷗外の晩年に至るまでの愛好の語であった。彊は強に同じ。

鷗外は、『易経』をよく勉強したようである。森潤三郎の著書にも「前年から隣家に文科大学教授で、当時猶結髪している根本通明翁が移轉して來られたので、兄は時々往って周易の講を開いた。(2)」と記す。

盪滌何憂無祕策　盪滌　何ぞ憂えん　秘策無きことを

唯悲塗炭害民良[一五九]　唯だ悲しむ　塗炭に民良を害するを

右は、日露戦争従軍中に作られた七絶の第三、四句である。ロシヤ軍を打ち負かす良策が、別にないわけではないが、戦争によって戦場となった中国の庶民に禍いをもたらすことを恐れるだけだ、というような意味であるが、「塗炭に民良を害す」は、『書経』（尚書ともいう）の「民、塗炭に墜つ」にもとづく。塗炭とは、どろにまみれ、火に焼かれる苦しみ、非常な難儀の意である。

『書経』も五経の一つであり、中国上代、つまり堯・舜の時代から、夏殷を経て、周代に至る間の歴史に関する書物である。

昨迎龍鳳駕　昨　竜鳳の駕を迎え
今拜綸言下[一二]　今　綸言の下るを拝す

明治十四年（一八八一）、明治天皇を詠じた詩の中の句である。「綸言」は、五経の一つである『礼記』の「緇衣」に見える語。『礼記』は、周末秦漢時代の礼に関する理論及び実際を記録編集したものである。それに「王言、糸の如く、其の出づるは、綸の如し」とある。「綸言汗の如し」と使われている如く、天子のことばは、一度出ると、取り消したり改めたりはできないとされるが、鷗外の詩の「綸言」とは、明治天皇が明治二十三年に出した国民選挙実施の詔書をいう。

平生唯厭嗟來食[一五三]　平生　唯だ嗟来の食を厭うのみ

これは、一橋同窓会幹事に寄せた戯作詩の中の句である。「嗟來食」は、『礼記』の「檀弓」「嗟來三食」という言葉にもとづく語で、あわれんでああ、来て食えといい、礼儀を欠いてあたえる食べ物の意である。

『春秋左氏伝』は、略して左伝ともいうが、これも、鷗外の愛読した中国古典の一つであるらしい。奥野信太郎の「鷗外における中国文学の位置」にも「殊に彼が好んで愛読したと思われる春秋左氏伝」というふうに指摘されている。左伝からの用例を見てみよう。

方技與期三折臂[一五四]　方技は与に期さん三折臂

台湾滞在中、友達の早川峡南氏に贈った七律の中の句である。早川氏は、日清戦争の時、鷗外とともに従軍した軍医で、この句は、医術の向上は、経験、とくに失敗の経験の積みかさねによる、という意味である。「三折臂」は、『左伝』「定公十三年伝」の「三たび肱を折って、はじめて良医となるを知る」をふまえている。

我推良史老琴臺[一二二]　われは　良史の老琴台を推さん

晩年の作品「東條琴臺題詩」の最後の句である。鷗外は、東條琴臺を、良史だといって賛えたが、この「良史」という言葉は、『左伝』「宣公二年伝」の「孔子曰く、薫狐、いにしえの良史なり」にもとづくが、もとは、孔子が春秋時代の有名な史官薫狐を賞賛した言葉なのである。

『論語』は、孔子や孔子の門弟の言行を記したもので、儒家の聖典とされている。年譜によると、鷗外が『論語』の素読を受けたのは、五歳の時であった。『論語』は、鷗外が出会った最初の漢籍かも知れない。

八面明徹　　八面　明徹なるは
本是吾文　　本　是れ　吾が文なり
僅窺一側　　僅かに　一側を窺みて
夫子自云〔一三〕　夫子　自ら云う

「今井武夫君に答う」という四言古詩の一節である。これは、医学の統計問題をめぐる今井武夫との論争を詠じた詩だが、右の四句は、僕の論文は、もともと、きわめて明白なものなのに、君は、わずかにその一端をとりあげて、勝手にものをいっているのだ、というような意である。ところで、「夫子自ら云う」は、『論語』「憲問第十四」の「夫子自道（孔子が自分のことを自分でいったという意）」から来たものだが、鷗外の詩では我田引水の意で使われている。

我愛高橋子　　我は愛す　高橋子の
耿介拔時流　　耿介　時流を抜くを
好古如食色　　好古は　食色の如く
夙夜苦窮搜〔一二〕　夙夜　窮搜に苦しむ

「高橋子」は、高橋健自のことで、『歴史圖録』の著者である。大正八年（一九一九）の秋、鷗外は、古都奈良へ出張する間にこの著書を読み、深く感動し、その感動を長詩に詠じた。右に引用したのは、その冒頭の四句である。「高橋氏は、俗世にぬきんでた、すぐれた志を持つ方で、歴史学と考古学に没頭している」という大意だろうが、第三句の「好古」は、『論語』「述而第七」の「述而不作、信而好古（述べて作らず、信じて古を好む）」という孔子の言葉にもとづく。古典を祖述するだけで、新説を創作せず、昔のことを信じて愛好するというのが、孔子の言葉の本来の意味で、これは、また、儒学をやる基本だとも言われるが、鷗外がここでこの言葉を使ったのは、ただ歴史学と考古学への高橋氏のなみなみならぬ情熱をいおうとしたものである。

昔有納貢客　　昔　納貢の客有り
千里來維舟　　千里来たりて舟を維ぐ

齎書儒與釋　書を齎す　儒と釈と
傳誦速置郵〔二二二〕　伝誦は置郵よりも速やかなり

さっきの例と同じく、高橋健自『歴史圖録』を詠じた詩からの引用で、第四句は、伝わることは、飛脚などで物や文書を伝送するよりも速いという意だが、『孟子』の言葉によるものである。『孟子』「公孫丑 篇上」には、孔子の話を伝えて、「子曰く、徳の流行は、置郵して命を伝うるよりも速やかなり」と述べられている。

翻思海嶋孤亭夜　翻って思う　海島孤亭の夜
逐客相遇話杞憂〔二二三〕　逐客　相遇うて　杞憂を話せしを

鷗外は、ドイツでの留学生活を終えて、帰国途中のロンドンで、東京を追われた尾崎行雄にめぐり合ったが、尾崎から新著の『退去日録』をもらった返礼に、七絶を四首作って贈った。右の詩句は、その第四首の最後の二句である。

ところで、ここの「逐客」、つまり追いはらわれた人は、はたして尾崎一人だけなのか、それとも鷗外を含む二人なのか、日本の関係学界では、意見が分れている。この問題に関しては、拙著『森鷗外の漢詩』の上巻二六二頁を参照されたいと思うが、ここで取り上げようと思うのは、「杞憂」という語である。「杞憂」という言葉は、偽作だという説もあるが、ふつうは戦国時代に出来たとされる、中国古典の一つである『列子』「天瑞」の「杞の人、天を憂う」の話によるものである。それは、中国語では「杞人憂天」または「杞憂」という言葉になるが、日本語では「杞憂」で使われている。ふつうは取越苦労という意味に使われるが、ただ心配事だという意味に使用されることも、あるようである。

宛然鵬翼奮南溟　宛がら鵬翼の南溟に奮が然し
驚見嘲風筆有靈　驚きて見る　嘲風の筆に霊有るを
說到今年漁史夢　今年の漁史の夢に説き到れば
始知醒客未曾醒〔二二四〕　始めて知る　醒客の未だ曾て醒めざるを

「未だ曾て、醒めず」と題する七絶だが、論争を詠じた詩だと思う。論争の相手は不明である。鷗外は、この詩で、今井氏は自分だけが醒めた人のように言っているが、実際には、まだ眠りから醒めていないんだよと、ふざけた調子で相手をからかっている。

ところで、第一句の「鵬翼の南溟に奮う」は『荘子』「逍遥遊篇」の「鵬の南冥（南方の大海）に徙ろうとするときは水の上をはばたくこと三千里、つむじ風にまたがって飛び上ること九万里」をふまえているのである。

『荘子』とは、戦国中期の道家荘周とその一門の思想を記した

ものである。荘周は、老聃（老子という）といっしょに「老荘」と呼ばれ、道家の開祖と見られる。ちなみに、老子には、『老子（道徳経ともいう）』という著書がある。

騏驥力不衰　　騏驥　力は衰えず
……
跛鼈憾遅々〔一三六〕　跛鼈　遅々たるを憾み

長詩「詩を以て柬に代え松渓子に復す」の中の二つの詩句である。「騏驥」は、すぐれた馬で、すぐれた才能を持つ松渓子にたとえられている。『荀子』の「勧学篇」の「騏驥一躍不能十歩（すぐれた馬でも、ひと飛びでは十歩を行くことができない）」にもとづくものであって、どんなに賢い人でも順序を追って学ばねばならないというたとえから出た語。「跛鼈」も『荀子』に見える語で、「修身篇」の「跛鼈千里」から来ている。「跛鼈千里」とは、足をひきずるすっぽんでも、歩きつづければ千里を行くという意味であり、たゆまず努めて中途でやめなければ、おろかな者でも成功するたとえである。鷗外は、自分を「跛鼈」にたとえて、進歩の遅いことを嘆いている。

用兵之道　　用兵の道
傳自西方　　西方より伝わる
疇若厥事　　疇か厥の事に若がいし
乃翁濫觴〔一五六〕　乃翁は濫觴なり

「大嶋先生銅像」と題する詩のはじめの四句で、大嶋氏の父親が西洋の軍事学を最初に日本に紹介したことをたたえたもの。第四句の「濫觴」は、『荀子』の「子道篇」の「其源可以濫觴（揚子江のような大河も、その源は、さかずきから溢れるような僅かな流れである）」から来ており、物事のはじめのたとえである。

『荀子』は、戦国末期の学者荀況の書である。荀況は、孟子につぐ大儒であって、孟子の性善説に対して、性悪説を唱えた人である。

鷗外は、郷里にいたころ、「左国史漢」、すなわち、左伝、国語、史記、漢書といった、中国古代の代表的な歴史書を愛読していた。これらの書物は、歴史書であるだけでなく、文学書でもあり、昔は、文章家の必読の書物とされていた。これらの書物の中で、もっとも鷗外に影響を与えたのは、漢の司馬遷の『史記』だったろう。鷗外晩年の写実的史伝文学『澀江抽齋』などは、明らかに『史記』の列伝の影響を受けているように思われる。彼の漢詩には、『史記』に見える典故や用語が十数例見えており、どの中国古典よりも多いことは、その現れである。次に、その中の二例を挙げる。

鵬翼同披海外雲　　鵬翼もて同に披　海外の雲

談兵未已又論文　兵を談じて未だ已まざるに　又　文を論ず
奇縁何日曾相結　奇縁　何れの日に　曾て　相結ばんや
不是人間燕雀群[九五]　是れ人間の燕雀の群ならず

ドイツへ留学に行く途中作った七絶である。同じ船でいっしょにヨーロッパ留学に行く青年たちは、みなただものではなく、大きな志を持つものばかりだ、というのが大意だが、最後の句の「燕雀」は、『史記』「陳涉世家」の「燕雀安知鴻鵠之志（燕雀、いずくんぞ、鴻鵠の志を知らんや）」をふまえている。燕雀は、小鳥で、志の小さい人のたとえであり、鴻鵠は、大鳥で、大志を持つ人のたとえである。

但懼世憒憒　但懼る　世は憒々として
明珠暗中投[一二二]　明珠の暗中に投ずるを

高橋健自『歴史圖録』を詠じた詩に見える二句で、世の中が良くないため、すぐれた才能を持つ高橋氏が不遇であるという意だが、第二句は、明珠暗投という成語をいかしたものであって、もともとは、『史記』「鄒陽伝」に見える言葉である。いかなる立派な玉でも、やみ夜に人の前に投げ出すと、人は、ただちに取ろうとはしないで、おどろきあやしむという原意だが、転じて、立派な才能をいただいている者が、認められず、不遇であるたとえとして用いられる。

萬卷文章屬無用　万巻の文章は　無用に属し
多君隻鬨解人頤[一二六]　多とす　君が隻鬨　人の頤を解くを

歌姫を詠じたベルリン留学時代の七絶の第三、四句である。万巻の本を読んだところで、このような場合、何の役にも立たないが、歌姫の一曲一曲は、私たち観衆をおおいに楽しませてくれた、どうもありがとうというような内容であるが、「解人頤」は、人を笑わせ、楽しませる意で、『漢書』「匡衡伝」の「匡説詩、解人頤（匡が詩を説けば、人々を楽しませる）」にもとづく。

『漢書』は、前漢の歴史を記録した書物であるが、これも、鷗外が幼いころ読んだ中国古典の一つである。

量力且運璧　力を量りて　且に璧を運ばん
君意似我不[一二三]　君が意は我に似たらんや

これまでたびたび例を引いたが、高橋健自『歴史圖録』を詠じた長詩の最後の二句である。僕はできるだけ頑張りたいが、君も同じだろう、という内容だが、「運璧」という言葉は、『晉書』「陶侃伝」に見えるもので、精神や身体を練るために努力

する意味である。陶侃は、晉の名将であり、有名な田園詩人陶淵明の曾祖父である。「運甓」は、陶侃が甓（しきがわら）百枚を朝夕に運んだという故事にもとづく。鷗外は、ここで、うまずたゆまず努力する意でそれを使ったのである。

なお、『晉書』は、西晉と東晉の正史であり、二十四史の一つである。

昂々未折雄飛志　昂々　未だ折けず　雄飛の　志
夢駕長風萬里船〔六二〕　夢に駕す　長風万里の船
……
萬里乘長風　万里の長風に乘ず
胸懷何濶大〔一四三〕　胸懷　何ぞ濶大なる

二つの詩から引いた例である。前の二句は代表作の七律「一笑す名優」の尾聯で、後の二句は、「友人の独逸に行くを送る」と題する古体詩の第一、二句である。

ところが、前の例の「長風万里」も、後の例の「万里の長風に乘ず」も、いずれも『宋書』「宗慤伝」に由来する。少年の慤が叔父宗炳に将来の志を問われたら、「願わくば、長風に乘じて、万里の浪を破らん」と答えたという。それは、遠くまで吹いて行く大風に乘じて果てしない大海を乘り越えること、つまり、大業を成就する、大きな志をいだく、という意味である。『宋書』は、南北朝時代の宋の正史であり、梁の沈約が勅命を受けて著わしたものである。

日東七客會天涯　日東の七客　天の涯にて会い
里昂灣頭上浮槎　里昂の湾頭　浮槎に上る
爲是傾蓋如故舊　是れが為　蓋を傾くること故旧の如し
相對欲忘去路賒〔一二九〕　相対して　去路の賒かなるを忘れんと欲す
……
休言老少難相得　言う休かれ　老少は相得難しと
傾蓋爲歡宿昔因〔一〇八〕　蓋を傾けて歡を為すは、宿昔の因なり

やはり二つの詩から引いた例である。前者は、「日東の七客の歌」の冒頭の四句で、フランスの港町マルセイユのリヨン湾で、いっしょに帰国の船に乘った七人の留学生が、はじめから、古い友達のように親しくつき合ったことを詠じている。後者は、「兪楡蓀より寄せられたる詩の韻に次す」と題する、晩年に作った七律の冒頭の二句で、年輩の鷗外と年少の兪との間の忘年の交りを詠じたものである。

ところが、前者の「蓋を傾くること故旧の如し」も、後者の「蓋を傾けて」も、『孔子家語』「観思第八」の「蓋を傾けて語ること終日なり、甚だ相い親しむ」に由来している。蓋は、蓋の異体字であり、車のおおいである。「傾蓋」は、孔子が程子と路上で出会い、たがいに車のほろを傾けて親しく語り合った

という故事にもとづくものだが、一見して親しく交わる意で使われている。

なお、『孔子家語』は、孔子の言行や門人との問答を書いたものであるが、魏の王肅の偽作だという説もある。

臥龍既死　臥竜　既に死せども
能却魏軍　能く魏軍を却く
簡冊歴々　簡冊は歴々たり
曾傳三分　曾て三分を伝う
赳々武夫　赳々たる武夫
拒戰太勤〔二三〕　戦を拒むこと　太だ勤めたり

これは、鷗外が、今井武夫と医学統計をめぐる論争を詠じた第二首の詩の冒頭の部分である。臥竜先生と呼ばれた諸葛孔明は、死んだのちも、なおかつ魏の大軍を退けることができた、君は武夫と名乗っているくせに、どうして正々堂々と戦いに応じられないのか、という大意である。

ところで、第一、二句の話は、南北朝時代の宋の人裴松之が晉の陳寿『三国志』「諸葛亮伝」に付けた注に見える。後世の史書『通鑑綱目』と『十八史略』にもある。それは、諸葛亮の率いる蜀の大軍が、司馬仲達の率いる魏の大軍と五丈原（陝西省宝雞県の東南）で最後に対陣したときの話だが、孔明が、陣中の疲れでなくなった。孔明の後つぎの姜維が孔明の遺言に従い、孔明の等身像を陣中に立てながら大軍を撤退させた。孔明がすでに死んだとのうわさを耳にした仲達は、魏の大軍を率いて追って来たが、蜀軍の孔明の等身像を見て、また、だまされたと思い、追撃をやめたという。この話は、『三国志演義』の大衆小説などによって中国の民間では広く伝わっている。いわゆる「死せる孔明、生ける仲達を走らす」がそれである。鷗外は、この典故を通じて、今井武夫を、小心者だと嘲笑しているのである。

以上、用語と典故などを例にして、『易経』にはじまる凡そ十五部の中国古典の経史と鷗外漢詩とのつながりの一斑を、かいま見て来た。ただ、中国の古籍が日本に伝わって、すでに長い歴史が経っている。数多くの言葉と典故が、日本語、日本文化の中に早くからとけこみ、定着し、その一部分となっている。したがって、これまで指摘した数々の例の中の、例えば、『列子』に源を発した「杞憂」などは、鷗外がたとえ『列子』を読まなかったにしても、使うことができたに違いない。つまり、それは、間接的な影響というべきものだが、しかし、中国の古典にもとづくものだという点では、同じことであるといえよう。

以上、鷗外漢詩と十五部の中国古典の経史（といっても主として哲学、思想、歴史に関する典籍に限るが）とのつながりについて、初歩的なアウトラインを描いてみた。

なお、鷗外は、中国の最古の医典である『黄帝内経』をよく

読んでいた上、中国の戯曲、絵画、剣道、雕塑などについても豊富な知識を持っていた。その意味でも、鷗外は、中国文化を熟知した学者だと言わねばならない。

二、中国古典文学、特に詩歌からの受容

『詩経』から数えると、中国の詩歌はすでに三千年あまりの歴史を持っている。古来、中国の知識人にとって詩を作ることは、必須の教養であり、上層社会への進出の手段であり、はては、仕官への道でもあった。そのせいでもあろうが、中国に詩人の多いこと、詩集が汗牛充棟の情況であることは、世界的に見ても稀有な現象だと思われる。

中国詩歌の日本文学への影響は、大きい。このことに関しては、日本の学者がすでに多くの著書を出しているので、詳しく述べないことにするが、ただ私がここでとくに言いたいのは、三千年あまりにわたる中国の詩歌、その多くの代表的詩人が鷗外漢詩にふかく投影しているということである。係わりのある詩人と詩集は、おびただしい数にのぼるが、いま、ほんのすこしの例を挙げながら、その投影のアウトラインを描いてみたいと思う。

曩投以木桃　　曩に投ずるに　木桃を以てせしに
瓊瑤辱報復〔一三六〕　瓊瑤　報復を辱けなくす

長詩「詩を以て柬に代え松渓子に復す」の詩句だが、明らかに、『詩経』の「木瓜」という詩の「我に投ずるに木桃を以てす、之に報いるに瓊瑤を以てす」をふまえている。『詩経』の句は、男女の求婚の風俗を歌ったものだが、鷗外は、それを竹馬の友である松渓子との書簡の往還にたとえて使っている。「木桃」は、桃で、自分の手紙に対する謙遜語であり、「瓊瑤」は、美しい玉で、友達の書信の美称である。

南都有鳴鹿　　南都　鹿の鳴く有り
呦々斷人腸〔一三〇〕　呦々　人の腸を断つ

奈良公園の野放しの鹿の善良なことと、そこを通る一部の人間の偽善で凶悪な性質を、対照的に取りあつかった詩の冒頭の二句であるが、明らかに、『詩経』「鹿鳴」の「呦々として、鹿の鳴くあり、野の苹を食らう、我に嘉賓有り、瑟を鼓し笙を吹く」を借りている。原詩は、群臣や賓客をもてなすときの宴会の詩である。明治初期の「鹿鳴館」の名称も、これによるものである。

『詩経』は、中国最古の詩集である。紀元前十一世紀から紀元前六世紀のころにかけて、中国北方の黄河流域の地において生まれた短篇の抒情詩三百五篇を集めたものである。それは、孔子によって編集され、手を加えられたものだといわれる。『詩経』は、五経の一つである。

一方、『楚辞』は、紀元前四世紀後半から紀元前三世紀前半にかけて、中国南方楚の国、つまり長江流域で作られた、長篇の抒情詩を中心とする詩集であり、中国古代の第二の詩歌集である。

『詩経』のほとんどが、民謡、または無名氏の作品であるのに対し、『楚辞』は、特定の詩人の作品である。その代表的な詩人としては、まず屈原とその弟子の宋玉の名を挙げるべきだろう。

説到今年漁史夢　今年の漁史の夢に説き到れば、
始知醒客未曾醒[一三二]　始めて知る　醒客の未だ曾て醒めざるを

「未だ曾て醒めず」と題する七絶の第三、四句である。前節で引用したことがあるが、論争を詠じたものだと思う。「漁史の夢」という、鷗外をからかう言葉に対して、鷗外は、屈原の「漁父」の詩句「挙世皆濁り、我れ独り清めり、衆人皆醉い、我れ独り醒めたり」をふまえて、今井氏は自分だけが醒めた人であるかのように言っているが、実際はいまだに醒めていないんだよと、反撃している。

去故如遺迹　故きを去るは　遺迹の如く
就新同救焚[一八五]　新しきに就くは救焚に同じ

晩年の「故きを去る」という詩の冒頭の二句である。「去故」「就新」は、宋玉の「九辯」という詩に見える。

愴怳懭悢兮、去故而就新。
（愴怳懭悢たり、故を去って新に就く）

宋玉の句の原意は、傷心失意の身は、いま故郷を去って見知らぬ土地に行こうとしている、というのだが、鷗外は、ここで「去故」「就新」を借りて、古い人、つまり前妻登志子との離別と、新人、つまり新妻との結合を表わしているように思う。

『詩経』『楚辞』と唐詩との間に出現した代表的な詞華集は、『文選』である。『文選』は、先秦から元朝まで、七、八百年間の、百三十名あまりの有名な作者による七百篇余の作品を収めた、中国現存最古の文学総集である。そのうち、詩歌は、凡そ四百三十五首、全体の半分以上を占める。その大部分は、五言古体詩である。

『文選』の日本への伝来は古く、その日本文学への影響は大きいと言えよう。聖徳太子の十七条憲法に、すでにこの書の影響を認める説があり、清少納言の『枕草子』に「書は文集、文選」、また『徒然草』に「文は文選のあはれなる巻々」とある。

用語、典故、詩体などの面で、鷗外漢詩は、この『文選』から、きわめて大きな影響を受けている。

携手河梁往事悠　手を河梁に携えし　往事は悠かなり
南荒歎我久淹留〔一五二〕　南荒に我　久しく　淹留するを歎く

台湾従軍中、早川峡南に寄せた七絶の冒頭の二句である。「携手河梁」は、『文選』に収められた漢の李陵の「蘇武に与う三首」の中の第三首冒頭の詩句「手を携えて河梁に上る、遊子暮れに何くにか之く」にもとづく。河梁とは、川にかかる橋のこと。「携手河梁」は、友人との別れを表わす詩語として使われる。

關心不獨秋風恨　心に関るは独り秋風の恨みのみならず
一夜歸舟過淚門〔一二四〕　一夜　帰舟は涙門を過ぐ

留学を終えての帰国途中に作った七絶から引いた詩句で、意気消沈した心情を詠じたものである。ここの「秋風恨」は、『文選』に見える漢の武帝の「秋風の辞」という詩をふまえているだろう。

蘭有秀兮菊有芳　蘭に秀有り　菊に芳有り
懷佳人兮不能忘　佳人を懐いて　忘るる能わず
……　……
歡樂極兮哀情多　歓楽極まりて　哀情　多し
少壯幾時兮奈老何　少壮幾時ぞ　老いを奈何せん

鷗外が「心に関るは独り秋風の恨みのみならず」と歌ったのは、たぶん、ドイツの少女エリスとの熱い恋、彼女との別れによる悲しみと関係があるのだろう。

一杯笑療相如渴　一杯笑って療す　相如の渴
粗服輕妝自在身〔一二四〕　粗服軽妝　自在の身

ベルリン留学時代の七絶「売漿の婦」の第一、二句で、「相如渴」は『史記』巻二七「司馬相如列伝」にもとづくものであり、『文選』に見える漢の賦の代表的作者である司馬相如の故事をふまえたものである。司馬相如は、糖尿病の患者であった。漢方では、糖尿病のことを、消渴病という。喉が渴くことが、その症状の一つである。それ以後、「相如渴」が、喉がひどく渴くことを表わす詩語として、しばしば詩人たちに好んで使われるようになった。例えば、唐の有名な詩人李商隠の「漢宮の詞」という詩に「侍臣　最も相如の渴有れども、賜わらず金茎の露一杯」とある。金茎とは漢の武帝が長生不老のため天界の露を集める器具。つまり武帝が建章宮内に高い銅柱を立て、その上に承露盤という皿をのせた。それで天界の露を集め、宝玉の粉末とあわせて飲めば、不老長生を得ると教えられたためである。

須臾玲瓏天樂起　　須臾にして玲瓏たる天楽起り
凌波女伴駕雲郎[一〇]　　凌波女は駕雲郎に伴う

ドイツ留学時代、ダンスに参加した経験を詠じた古体詩から引用したものだが、「凌波女」は、三国時代の魏の詩人であり、文学者である曹植の「洛神賦」の「波を凌いで微歩し、羅韈塵を生ず」にもとづいているだろう。曹植の句は、洛陽を流れる洛水という川の女神が、軽やかに川の水面を歩く様子を描いたものだが、鷗外は、軽やかにダンスを踊るドイツの若い女性を、洛水の女神にたとえている。なお、曹植は『文選』における詩と賦の重要な作者の一人である。

風露秋深籬菊花　　風露　秋は深く　籬の菊花
隔花伊軋聽繅車[四四]　　花を隔てて伊軋たる繅車を聴く

『後北游日乗』に見える、青森と岩手の境目の山村を詠じた七絶の第一、二句である。鷗外は、「籬の菊花」と歌ったとき、きっと陶淵明の名句「菊を採る　東籬の下、悠然として南山を見る」を想起したにちがいない。「南山」は、陶淵明の故郷の南にある廬山のことをいう。陶淵明の句は、悠々自適の隠士生活を表わすものだが、鷗外は、「籬の菊花」で山村ののんびりとした雰囲気を、表わそうとしたのだろう。なお、陶淵明の句は、『文選』に収められた、彼の「雑詩二首」に見える。

＊　＊　＊

唐詩は、中国詩歌発展のピークである。唐の時代は、紀元六一八年から、九一七年までの三百年だが、国勢の発展に応じて、詩人が輩出し、おびただしい数の詩歌が、作り出された。ずっと後世の清の時代になって、康熙帝の命によって、そのころまで伝わって来たすべての唐詩を編集し、刊行した『全唐詩』九百巻によれば、収められた詩は、約五万首、詩人は約三千人に達している。いうまでもなく、この数でも、唐詩や唐詩人のすべてというわけではないだろう。

唐詩のめざましい発展には、原因がいろいろあると言えよう。まず、経済の繁昌、文化の融合、思想的解放などが挙げられるが、そのほかに、詩を作ることが、科挙試験の課目になっていたことと、たいへん密接な関係があると思う。特に「進士科」において、必ず作詩が課されることになっていた。「進士」に及第するためには、作詩が巧みにできなければならなかったのである。

唐詩が日本に伝わってから、すでに千二、三百年の歴史がある。それが日本文化に与えた影響には、大きくて深いものがあり、それがいまなお続いているように見える。日本の書店をのぞくと、唐詩に関する一般的な本や研究書が数多く見られるし、NHKや各地のカルチャーセンターにも、唐詩の講座が設けられている。中学や高校の教科書にも、唐詩が取り入れられてお

り、詩吟のサークルでも唐詩の名作が声高らかに歌われている。李白の「白髪三千丈」や杜甫の「国破れて山河在り」など、唐詩の名句のいくつかが、熟した表現として日本語に定着している例も、少なくないようである。

三千年にわたる中国の詩歌の歴史の中で、鷗外に一番影響を与えたのは、唐詩である。江戸時代の『唐詩選』の流行と関係があるだろう。鷗外は、幼少のころから唐詩を受読し、『唐詩選』の中の多くの詩を諳んじていた。唐の著名な詩人、例えば、李白、杜甫、白楽天、王維、寒山、杜牧などはすべて鷗外漢詩に投影している。次に、それぞれ例を挙げてみよう。

烟雲冥處鱗光動　煙雲の冥き処　鱗光　動き
疑是髯龍騰九天〔七〕　疑うらくは是れ　髯竜の九天に騰るかと

『北游日乗』からの引用で、いまにも雨が降ろうとする空を描いた詩句だが、「疑是」の句は、廬山の瀑布を描いた李白の詩「廬山の瀑布を望む」の詩句「飛流直下三千尺、疑うらくは是れ銀河の九天より落つるかと」をふまえているだろう。ただ、李白は銀河が落ちたのかと瀑布を形容したのに対し、鷗外は、鬚もぢゃの竜が天にのぼるのかといい、航行中だった利根川を表現したのである。天から降るのでなく、天にのぼるというように、方向を逆にしながら、李白の表現を生かしたと言えよう。

紅粉翠黛嫵媚巧　紅粉翠黛　嫵媚巧みに
翻雲覆雨人情汚〔一九〕　翻雲覆雨　人情汚なし

同じく『北游日乗』からの引用で、新潟の歓楽街の遊女を詠じた詩句である。

第二句は、明らかに杜甫「貧交行」の次の詩句にもとづいている。

翻手作雲覆手雨　手を翻せば雲と作り　手を覆せば雨となる
紛々輕薄何須數　紛々たる軽薄　何ぞ数うるを須いんや

杜甫の詩句は、進士の試験に落第して都に寓居していた当時、人情の軽薄なことを嘆いたものである。鷗外は、「翻雲覆雨」で新潟の遊女の軽薄な人情を表わしている。

ところで、鷗外は、この表現がたいへん好きだったようで、他にも「雲翻又雨覆」「覆手」「翻覆」などがしばしば見える。

去來何必問因緣　去来　何ぞ必ずしも因縁を問わんや
入地昇天任自然〔二八〕　入地と昇天は自然に任す

鷗外晩年の詩句で、彼の屈服しない精神と独立自主の品性を

表わしたものである。第一句の「去来」は、死ぬことと生まれることの意だが、第二句の「入地昇天」は、地獄に堕ちて幽霊亡者になることと、それとも成仏することをいう語である。これは、白楽天の長詩「長恨歌」の「昇天入地求之徧（天に昇り、地に入って之を求むること徧し）」から来ている。ただ、「長恨歌」の句は、玄宗皇帝が楊貴妃を夢の中に見ることができなかったので、彼女の魂を呼びもどしてくれと、道士に頼んだ、ところが、道士は、天上界と地下を、いくらさがしまわっても、とうとう見つからなかったという話が背景になっている。それに対し、鷗外の「入地昇天」は、死後、天国に行くか、地獄に行くかは、自然にまかせて、まったく気にしないという意味に使っている。

水柵天明警柝鳴　水柵天明　警柝鳴る
渭城歌罷又傾觥〔六三〕　渭城の歌罷りて　又た觥を傾く

明治十七年（一八八四）八月、ドイツ留学に出発するさいの詩句である。「水柵」は横浜港をさす。「警柝」は汽笛のこと。横浜港で夜あけどきに客船が汽笛を鳴らした、いよいよ出発だ、というのが第一句の意であるが、第二句の「渭城歌罷」は、唐の王維の名詩「元二の安西に使いするを送る」をふまえている。

渭城朝雨浥輕塵　渭城の朝雨　軽塵を浥す
客舎青々柳色新　客舎　青々　柳色　新たなり
勸君更盡一杯酒　君に勧む　更に尽せ一杯の酒
西出陽關無故人　西のかた　陽関を出ずれば故人無からん

これは、古来、別離を詠じた代表的な詩である。この詩は、また楽曲が付けられて、陽関曲、または陽関三畳という歌にもなっている。王維の詩は、もとより、陽関三畳という歌曲も、はやくから日本に伝わった。それは、「西のかた、陽関を出ずれば、故人無からん」を三度くりかえし、最後にまた「故人無からん」を三度くりかえしていて、友人との別れを惜しむ気持を、あますところなく歌い上げたものである。鷗外がここで「渭城歌罷」といっているのは、王維の詩の朗吟、あるいは歌曲の陽関三畳を指しているとも取れるが、単に親族や友達との離別を表わす詩語として借用しているだけだと理解した方がより良いだろう。

茶盞一碎中　茶盞　一碎の中
千歳傳雙美〔一四〇〕　千歳　双美伝わる

「茶碗」と題する五言絶句の第三、四句である。「双美」は、たぶん唐の詩僧寒山の「生死の譬えを識らんと欲せば、且く氷水を将って比えん」に始まる詩の詩句「氷と水と相い傷なわず、

生と死と還た双ながら美し」にもとづいているだろう。鷗外がここで言う「双美」は、永富獨嘯庵と勧修寺経敬との、度量の広いことをたたえた語である。ちなみに、唐の詩人の中で、詩僧寒山は、鷗外の好きな詩人の一人であった。鷗外の歴史小説「寒山拾得」は、この詩僧寒山とその親友の僧拾得の話を描いたものである。

狂名到處任人傳　常住之心推不遷
一覺揚州乘鶴夢　孤帆細雨信濃川[五六]

狂名到る処　人の伝うるに任す
常住の心は推して遷らず
一たび覚む　揚州乗鶴の夢
孤帆細雨の信濃川

『後北游日乗』に見える詩である。その日の日記には「雨ふる安全丸に乗りて新戸を立つ」とある。鷗外のこの詩は、唐の杜牧の「懐いを遣る」という詩をふまえている。

落魄江湖載酒行　楚腰纖細掌中輕
十年一覺揚州夢　贏得青樓薄倖名

江湖に落魄して　酒を載せて行く
楚腰纖細　掌中に軽し
十年一たび覚む　揚州の夢
贏ち得たり　青楼薄倖の名

杜牧の詩は、彼が若いころ揚州の青楼（妓楼）に出入りしたことが夢のようだというものである。鷗外の詩は、彼が二度目の新潟の旅のときに詠じたものだが、第一句の「狂名　到る処　人の伝うるに任す」は、内容的に杜牧の詩の第四句「贏ち得たり　青楼薄倖の名」と似かよっているし、第三句の「一たび覚む　揚州乗鶴の夢」は、明らかに杜牧の詩の第三句「十年一たび覚む　揚州の夢」をいかしたものであろう。

ついでにいえば、鷗外は二度にわたって新潟に出張したが、滞在は、決して長くはないのに、その間に作った漢詩の中に、新潟の遊女や妓楼にふれた詩が、合せて五首もある。

＊　＊　＊

宋代の代表的な文学ジャンルとしては、新しく流行した詞がある。その詞が鷗外漢詩にどう投影しているだろうか。

まず、鷗外の二百二十四首の漢詩の中に、「酔太平――況斎先生に呈す」という詞があることを挙げたい。つぎに、宋詞の代表的な作者である柳永、蘇東坡、周邦彦などの作品が鷗外の漢詩に投影していることを述べてみたい。

數點船燈看已失　曉風殘月滿橫灣[二六]

数点の船灯　見るみる已に失す
暁風残月　横湾に満つ

『後北游日乗』に見える、暁の横浜港の風景を描いた詩句である。「暁風残月」は、宋の柳永の代表的詞「雨霖鈴」から来ているかも知れない。その中の一節をみてみよう。

多情自古傷離別　　多情　古より離別を傷む
更那堪　冷落清秋節　　更に那ぞ堪えん　冷落清秋の節
今宵酒醒何處　　今宵　酒の醒むるは何れの処ぞ
楊柳岸　曉風殘月　　楊柳の岸　曉風残月

柳永の詞は、別れのせつなさを歌ったものだが、鷗外は、ただ「曉風残月」という表現を借りて、港の明けがたの景色を描写したにすぎない。

綸巾羽扇　　綸巾羽扇
何圖走君〔一三〕　何ぞ図らん　君を走らせるを

今井武夫に寄せた詩の中の句である。「綸巾羽扇」は、蘇東坡の名詞「念奴嬌」の次の句をふまえている。

羽扇綸巾　　羽扇綸巾にて
談笑間　　談笑する間に
強虜灰飛煙滅　　強虜は灰と飛び煙と滅えぬ

「綸巾羽扇」は、絹織物の頭巾と羽毛の扇の意だが、学者のよそおいをいう。転じて、諸葛孔明や周瑜など武将でありながら、学者のような姿をしていることのたとえとなった。

「大江は東に去り」に始まる蘇東坡のこの「念奴嬌」という詞は、古来、懐古の絶唱として、ずっと中国人に愛誦されてきたが、それは、三国時代の呉の若い将軍周瑜が、蜀の諸葛孔明といっしょに、魏の曹操の大軍を、火攻めにし赤壁で破った時の英姿を歌ったものである。引用文の「羽扇綸巾」は、周瑜の幽雅な姿を象徴したものだが、鷗外の「綸巾羽扇」は、むしろ、論争の相手の今井武夫氏を嘲笑しているように思われる。

滿目寒烟秋色悲　　滿目の寒煙　秋色　悲し
笛聲楓影立多時〔九〕　笛の声と楓の影に立つこと多時なり

『北游日乗』に見える詩句だが、「立多時」という詩語は宋詞の名人周邦彦の詩「夜游宮」に使われている。

橋上酸風射眸子　　橋上　酸風は眸子を射る
立多時　　立つこと多時なり
看黃昏燈火市　　黄昏の灯火の市を看る

「酸風」は、身にしみる風、「眸子」は、ひとみの意。

宋の文学家たちは、詞だけでなく、詩も書く。例えば、蘇東坡、陸游などが、そうである。宋の詩人たちの詩も、鷗外漢詩に投影している。例えば、鷗外の「波間に忽ち埋む青一髪」という句の「青一髪」は、蘇東坡の「澄邁驛通潮閣二首」詩句「青山一髪是れぞ中原」に由来する。宋詩の投影については、

詳しく述べないことにしたい。

＊　＊　＊

時代は、元に入るが、元の代表的な文学ジャンルは、戯曲である。文学史では、元曲という。鷗外は、元代の戯曲にも興味があり、それをかなり読んだようである。彼は、元曲の代表作で、北曲の祖とされる『西廂記』を研究したことがあり、また元末の戯曲で南曲の祖といわれる『琵琶記』を好んでいたらしい。その証拠として次の事実を挙げることができる。明治三十一年二月二十七日の日記に「標新領異録を作らんがために琵琶記を再読す」とあり、同三月二日の日記に「琵琶記の梗概を篤次郎に口授す」とある。また、同三月二十七日の日記に「琵琶記を評す」と記されているが、その論文は、同四月の「めざまし草」巻二十二に発表されている。(3)

ところが、『西廂記』と『琵琶記』に代表される元の戯曲が、鷗外漢詩にどう投影しているか、筆者の甚だ興味を感じる問題である。ただ、時代が下るにつれて、言語表現が豊富になり、『西廂記』や『琵琶記』ならではの用語をのぞいては、鷗外漢詩に見える言葉であっても、蘇東坡の「青山一髪」のように、『西廂記』や『琵琶記』から直接来ているとは、速断できないところがある。しかし、『西廂記』の作者王実甫または『琵琶記』の作者高明の独創的な表現かどうかを決めることは、きわめて困難なことである。したがって元曲の投影に関する断定的な例を挙げることができないが、次の一つを、参考までに録しておく。

休道詩人腸不剛〔一五八〕　道う休かれ　詩人の腸　剛からずと

従軍中の詩句だが、これは、あるいは、『西廂記』の祖先に当る「西廂記諸宮調」の次の句と関係があるかも知れない。

莫道男兒心如鐵　道う莫れ　男児の心は　鉄の如し

右に引用した二つの句は、形の上でも内容的にも似かよっていると言えよう。

それでは、元の時代の二人の詩人の詩から例を引いてみよう。これも、断定的なことは言えないが、いちおう、参考までに録しておく。

丹波何曾無豪氣　丹波　何ぞ曾て豪気無きや
每遭風濤卽消磨〔六八〕　風濤に遭うごとに　即ち消磨

ドイツ留学に行く途中作った「日東十客の歌」の詩句である。丹波は、鷗外と同じ船でヨーロッパへ留学に行く丹羽敬三のことであって、摂津の人、裁判化学を修める。

ところで、右の「丹羽」の句は、あるいは元の詩人薩都剌の詩句「平生の豪気　虹の吐くが如し、余子　紛々何ぞ数ふるに

足らん」を、逆の意味に生かしたものかも知れない。

連鑣賞開花〔一三六〕　鑣を連ねては　開花を賞し

長詩「松渓子に復す」の中の句で、二人が手を取り合っていっしょに花見に行く、という意味だが、ここの「開花」という語は、あるいは、元の詩人耶律楚材の「西域河中十詠」の中の詩句「杷欖の開花を看る」から来ているかも知れない。なぜなら、「開花を賞し」と「開花を看る」は、表現のしくみも、意味も同じだし、特に「開花」という語を、開かれた花、咲いた花という意味で使うのは珍しいからである。「開花」という言葉は、花が咲くという意味に使われるのが、ふつうである。例えば、桃樹開花といえば、桃の木が、花が咲くという意味になる。

＊　＊　＊

明の時代に入る。明の初期の詩人高啓（高青邱）の詩は日本で良く受けいれられているようである。彼の「胡隠君を尋ぬ」と題する詩、「水を渡り、復た水を渡る。花を看、還た花を看る。春風、江上の路、覚えず　君が家に至る」は、春光融々たる江南の風景と、ゆうようと迫らざる詩人の心境を描いたものとして日本の人々に格別に愛好されているようである。

鷗外も、また、高青邱の詩がすきであった。彼の詩集「於母影」には「青邱子」という詩があるが、それは、高青邱の詩「青邱子歌」を和訳したものである。

勸君休踏蘇高跡〔一三二〕　君に勧む　蘇高の跡を踏むを休めよ
至竟多言是禍媒　至竟　多言は是れ禍の　媒なればなり

『還東日乗』に見える詩句で、尾崎行雄に多言しないことを勧めたものであるが、「蘇高」は、直言で左遷された、宋の政治家であり、詩人でもある蘇東坡と、言論関係で処刑された明の詩人高青邱の二人をいう。この二人は、多言の戒めの例として挙げられているのである。

中国では、漢の文、唐の詩、宋の詞、元曲、明清小説という表現で、漢代以降二千年余りの中国文学史の主流を概括する。つまり、それぞれの時代に、それぞれの代表的な文学ジャンルがあったということである。

明清時代には、大衆小説が流行し、その中から少なからぬ佳作が生まれた。鷗外は、学生時代から明清時代の小説を読むことがすきだったようである。彼は、『金瓶梅』や『水滸伝』を読んだことがあるし、中でも『水滸伝』に関しては、本格的な研究を行い、明治三十八年八月「めざまし草」巻二十二に「水滸伝論」を発表している。

鷗外の読書範囲が明清の小説にも及んでいることは、一部の学者の指摘するところであり、彼の自伝的小説「キタ・セクスアリス」や「雁」にも関係の記述が見られるが、幸いなことに

『水滸伝』から一つの例を見つけた。

風評入耳浦山敷　　風評の耳に入りて　浦山敷く
久欲以投名状投〔五三〕　　久しく投名状を以て投ぜんと欲す

一橋同窓会幹事に寄せた狂詩体の詩に見える詩句である。あざ笑う気持を表わすためだろうか、この詩には、和製漢語や中国語の俗語がふんだんに使われている。「浦山敷」は、うらやましい。日本語の宛字で、中国語にはない。だが、「投名状」は、中国語の俗語である。俗語は、ふつう、典雅な文学だとされる漢詩には適さない。そして、「投名状」という言葉は、いまでは、すでに死語になっているが、しかし、『水滸伝』の百二十回本の第十一回「朱貴　水亭にて号箭を施こし、林冲　雪の夜に梁山に上る」に見える。投名は仲間入りの意。状は、ふつうは、手紙とか、紹介状の意味もあるが、『水滸伝』では、手みやげの意になっているようである。したがって、「投名状」は、林冲が梁山泊に仲間入りするための手みやげ、お礼の意であるが、具体的には、山をおり、強盗をして、奪い取った財宝を親分に贈ったことをいう。

鷗外の「投名状」も、だいたい同じ意味で使われたものであり、手土産をぶらさげて一橋同窓会に仲間入りさせてもらう意味である。「この間開かれた一橋同窓会の成立大会はたいへん賑やかだった、という噂が耳に入り、浦山敷く思い、早くから手土産を以て行って仲間入りさせてもらおうと思っていた」というのが、右の二行の詩の内容である。

軍營一夜無聊甚　　軍営の一夜　無聊　甚だし
餘事還爲柳敬亭〔一四六〕　　余事は還た柳敬亭を為す

日清戦争従軍中、朝鮮で作った七絶の第三、四句である。軍隊の夜の生活は、とても、つまらないもので、暇つぶしに寄席を聞きにゆくという意味。清の思想家黄宗羲の「柳敬亭伝」によれば、柳敬亭は、中国江蘇省北部の泰州の人であり、明代の有名な愛国的説書人（日本の講談師に当る）である。鷗外がここで「柳敬亭」を使うのは、修辞的には、借代法というもので、落語、漫才、講談などを興行する寄席をさす。

＊　＊　＊

これまで、多くのスペースをさいて、詩経の時代から明清の時代にいたるまで、三千年にわたる中国文学、特に詩歌からの、鷗外漢詩における受容のアウトラインを描いてみたが、いうまでもなく、きわめて不充分なものである。しかし、これは、やむをえないことだといわねばならない。もしできることなら、この節の「中国古典文学、特に詩歌からの受容」を、もっと時間をかけて詳しく研究する必要があると思う。私が調査しえた例も、上に挙げたものには止まらないからである。以下、念のため、私が出典として調査しえた主な例を、挙げておくことに

する。

◎文選――五十二例（うち陶淵明が八例）。

◎唐詩――百三十五例。その内訳は次のとおり。

杜甫――三十九。李白――三十五。白楽天――三十七。王維――十一。寒山――十。杜牧――三。

韓愈などほかの詩人の例は、この数に含まない。

◎宋の詞・詩――二十七例。その中に、

陸游――十七。蘇東坡――十。

その他、例えば、黄庭堅、楊万里、歐陽修などの例もあるが、やはりここでは含めていない。

この一節に、例として挙げているのは、調査例のほんのわずかにとどまる。

◎文選――五人の詩人、各人一例。

◎唐詩――六人の詩人、各人一例。

◎宋の詞・詩――四人の計六例。

＊　＊　＊

最後に、私なりの結論を述べてみたいと思う。

(1) 鷗外の漢詩は、三千年にわたる中国文学、特に詩歌から豊富な栄養を汲み取っていると言える。

(2) なかでも特に『文選』と唐詩からの受容が大きい。私の印象では、鷗外の得意とした五言古体詩は、『文選』に学び、七絶と七律は、『唐詩選』に学んでいるようである。

(3) 鷗外の好きな中国詩人の名は、数多く挙げられるが、李白、杜甫、白楽天が、だいすきだっただろう。なかでも、杜甫の影響が一番大きいと思う。

三、漢詩の表現形式・技巧・思想を熟知する鷗外

第一、二節で述べたことを通して、中国の文化・文学、特に詩歌に関する鷗外の造詣の深さをほぼ説明することができたと思われる。この一節では、鷗外が、漢詩の表現形式、技巧、思想を熟知していることについて述べたいと思う。

文学・芸術のどのジャンルも、同じだろうが、長い時間の試練を経て成熟するうちに、表現形式、技巧、思想の面において、一部、固定したものを形作るようになる。歴史の長いものほど、こうした固定したものが多いように思われる。例えば、俳句の季語が一例だと思うが、俳句の発展にともなって、季語も、ますます豊富になった。また、中国の京劇と日本の歌舞伎も、そうだと言えよう。

中国文化という土壌に深く根をおろした漢詩は、長い歴史的発展の中で、独特の表現形式、技巧、及び思想を、たくさん形成して来た。

詩才にめぐまれ、漢文が書けて、押韻、平仄（ひょうそく）、対句（ついく）など、漢詩を作るルールをマスターしたら、いちおうは、作詩できるとしても、しかし、良い漢詩を作るには、また漢詩の土壌である中国文化や文学、並びに漢詩独特の表現形式・技巧・思想について豊富な知識を持たなければならない。鷗外は、これらの条

件を全面的に備えたからこそ、優れた漢詩人になれたのである。

＊　＊　＊

まず、第一に、鷗外は、漢詩の表現形式を熟知し、それを、思う存分使うことができた人である。

ここで言う表現形式とは、表現符号といってもいいだろうが、主として言語表現、つまり詩語をさす。漢詩の言語表現には、二つの特徴がある。一つは、古語が多いこと、これは、三千年にわたる歴史的発展の沈積だと考えてもいいだろう。これらの古語の多くは、現在では、すでに分かりにくい言葉、はては死語になっている。もう一つは、つねに直言を避けて、比喩、暗示など、極度に微妙な含蓄を持たせる表現、ときには表裏二重の意味を持たせる表現を取ることである。この意味からして、漢詩の表現系統は、多少暗号電報と似かよったところがあると言っても、決して言い過ぎではない。優れた漢詩人になるには、こうした表現技術を身につけなければならない。逆に言えば、こうした暗号電報のような表現技術に通じなければ、漢詩を読みこなすことも、難しい。字づらの意味、または皮相的なことは分かっても、ほんとうの意味、または裏に隠れていることは、しばしば分からないことがある。

ところが、鷗外は、漢詩の表現技術を熟知し、それを自由自在に駆使できた。だからこそ、彼の漢詩も、またたいへん難しいものとなる。難解きわまる古語が、いっぱい使われているだけでなく、暗号電報のような表現が随処に見られる。

次に、彼の漢詩から、その一斑をうかがってみよう。

◎騏驥――すぐれた馬。すぐれた才能を持つ人のたとえ。友人に対する尊敬語。

◎駑駘――のろい馬。才能のおとっている人のたとえ。みずからを言う謙譲語。右の二つは、古代の、人間と馬との密接な関係を表わすもの。

◎丹青――絵画。書籍。歴史をさすこともある。

◎挂錫――常住の僧侶。

◎飛錫――雲水僧。

◎木桃――素樸な贈物を言う謙譲語。友達への手紙。

◎瓊瑶――立派な贈物の美称。友達からの手紙。

◎軽羅・纖手・裙釵・玉纖――美しい女性の比喩。

◎袖・紅裙――若い女性の代名詞。娼妓をさすこともある。

◎芙蓉――美人のたとえ。

◎芙蓉香老――美人が初老に入る。美人の美しさが衰える。

◎金・玉・金玉・綺羅・錦鑪――いずれも美しいもの、得がたいもの、尊いもののたとえ。漢文化における金・玉・シルクの高い地位が窺える。

◎蒹葭――粗末で、つまらないもののたとえ。

◎風月――自然の美しい景色であると同時に、良い詩のたとえでもある。

◎堯・舜・禹――聖人の代名詞。

◎鴛鴦・琴瑟相和――仲の良い夫婦のたとえ。
◎翡翠（鳥）――小さくて美しいもの。女をさす。
◎鯨魚――大きくて力づよいもの。男児のたとえ。
◎廟廊・廟堂――政府をさす。
◎朝衣・朝衫・朝服――官職についていること。
◎拂衣・挂冠・解綬――官職をやめて引退する。
◎干戈・戰雲・陣雲――いずれも戦争の比喩。
◎胡茄――外国、または異民族地域のたとえ。
◎龍・鳳凰――皇帝・皇后のたとえだが、転じて皇帝、皇室、都、首府などと関係ある言葉に使われる。例えば、鳳城、龍旌、鳳山などが、それである。
◎鵬――大きな志、また遠くまで行くことを表わす。
◎麒麟――すぐれた人物、また天才のたとえ。ところで、右の「龍・鳳凰・麒麟」は、いずれも、想像上の架空の動物だが、昔、中国では、とても大事にされて、亀を加えて「四霊」と呼ばれていた。中国文化における、この「四霊」の高い地位は、論理以前の不思議なものがあったと言えよう。
◎松樹――節操を守ること、正直であること、また、長寿であることを象徴する。
◎梅花――春のおとずれ、早春のシンボル。
◎楊柳――いろんな意味の象徴として使われている。例えば、別離、春、無力など。

舟を言おうとすれば、扁舟、一葦などの詩語を用いる。万トン級の大船であってもかまわない。実際のところ、鷗外がドイツ留学に行くとき乗ったフランスの客船は、かなり大きな船だったはずだが、彼の詩では、「扁舟」となっている。

大きな志を言うときには、大志と言うよりも、「四方志、青雲志、鵬翼、鵬程、長風万里」などの詩語で表わす。それに対し、志の小さい人は、「燕雀（えんじゃく）」にたとえられる。

夜おそくまで、という意味には、剪燭・剪殘燭（ろうそくの芯を切ること）が使われる。実際は、電灯であっても、いっこう構わない。

別離を表わす詩語には、柳のほか、渭城の歌や、はなればなれになっている夜空の星の参（しん）と商（しょう）が用いられる。

そして、故郷を離れてさすらうことは、萍（浮き草）、または蓬（よもぎ）にたとえられる。

故郷を離れて旅をする人のことを、征人・征夫・征衫・征途・客衣・游子という。

それに対し、故郷・故国のことを、故山・故園・家山・小園という。

旅先と故郷が遠く離れることは、雲路・天涯・水雲際などの詩語で表現する。

そして、旅愁を表わすのに、落日、猿声などが用いられるが、猿の鳴き声を聞こうが、聞くまいが、問題にしない。

＊　＊　＊

第二に、鷗外は、漢詩の難しい技巧の多くを使いこなした人だと言うことである。そのことを用典（典故の使用）、双関（かけことばの使用）、誇張、借用（本歌取り）、詩化（詩的情緒を持たせるために地名などを改造する）、詩眼（字眼）など、六つの技巧について例を挙げながら説明したい。

(1)用典（典故の使用）

例えば、長詩「松渓子に復す」に「賈子　忌鵩を賦す」という句があるが、これには一つの典故が使用されている。「賈子」は、漢の時代の思想家賈誼のこと。「忌鵩を賦す」は、賈誼の代表作「鵩鳥賦」をさす。鵩鳥とは、つまり梟であり、中国では不吉な鳥とされて、その鳥が人家に来ると、その家の主人が死ぬと言われる。夏のある日の夕方、一羽の梟が賈誼の宿舎に飛んで来て、賈誼のそばにとまって、動こうとしない。もともと、都から南方の低湿の地長沙に転出して来た賈誼は、それでなくても、長くは生きられないと思っていたので、この不吉な梟の飛来をたいへん悲しく思い、「鵩鳥賦」を作ったという。その中に「禍は、福の倚るところ、福は、禍の伏するところ、憂喜　門に聚り、吉凶　域を同じくす」とある。それは、禍と福がお互いに転換するという思想を表わしている。鷗外は、この典故で、万事は塞翁が馬だよと、明治七年鷗外とともに東京医学校の予科に入学したが家庭的事情により、明治十二年初夏、田舎に帰った竹馬の友の松渓子を励ましたのだと思う。

典故の使用は、漢詩を作る技巧の一つである。典故を巧みに使うことができるかどうか、これは、漢詩人のレベルを計る重要な尺度の一つだと考えてもよい。鷗外は、その点、典故の使用が、とても上手であって、彼の漢詩に、数多くの典故が、いずれも巧みに使われている。漢詩における典故は、中国の人文・社会・歴史の厚い地層に根をおろしたものなので、それには、一つ一つに豊富な情報が託されているということである。まるで豊富なデータをインプットした現代のフロッピーディスクみたいなものである。上例のたった五つの漢字が、あれだけ豊富な内容を持ち、あれだけ深い人生哲学を包んでいることは、そのことを物語る有力な証拠だということを強調しておきたい。

(2)双関（かけことばの使用）

久矣丘園栽遠志　　久し　丘園に遠志を栽うること
薬嚢那敢貯當歸。〔一七三〕　　薬嚢　那ぞ敢えて当帰を貯えんや

荒木鳳岡を詠じた詩句である。「遠志」と「当帰」は、かけことば。漢方薬の名前であるとともに、遠大な志と、せつない望郷の念を表わしている。詳しくは拙著『森鷗外の漢詩』（下）の四三二頁を参照されたい。

そのほか、詩〔一二七〕では、「石丈」と「黒頭」の二語を使って、同じ船で帰国する上司石黒忠悳の苗字を、それぞれ詩句の中にはめこんでいる。これは、漢詩では「嵌名詩（名をは

める詩)」といい、かけことばの一種である。「石丈」は、人間の形をして立っている石のこと、「黒頭」は、黒頭公の略で、若い官吏の意。したがって、この詩では、石黒忠悳の苗字をはめこんだばかりでなく、そいつは、若い官吏だが、石ころのような頑固者だと、暗に上司の石黒忠悳をからかっているのである。かけことばの技巧としては、みごとな出来ばえだと言えよう。

また、中国の彫刻を詠じた詩〔一六五〕では、「金人語」、「石馬奔」で、古代彫刻の材料であり、彫刻の代名詞でもある金石の二字を、二つの詩句にはめこんでいる。そして、「金人語」は、金属で彫った人物像が、すぐにも語りかけようとする意で、「石馬奔」は、石で彫んだ馬がまるで今にも走り出すようだという意である。つまり、鷗外は、「金人語」と「石馬奔」のかけことばに、中国の彫刻品は生動しているという意味を託しているのである。

かけことばを使うことによって、表裏二重の意味を持たせ、詩に深い奥行きと趣を与えることができるが、実はこれは、たいへん難しい技である。にもかかわらず、上述の三例からも明らかなように、鷗外は、こうした技を巧みに生かしている。

(3)誇張

誇張も、漢詩の技巧の一つである。その最も代表的な例は、李白の「白髪三千丈」、岳飛の「怒髪　冠りを衝く」であろう。ちなみに岳飛の句は『史記』「藺相如伝」の「怒髪上衝冠」にもとづくものである。鷗外も、誇張という技巧を好んで使った。一例を挙げてみる。

雨氣壓車人語濕〔五九〕　雨気　車を圧し、人語　湿る

「雨氣」は、雨が降りそうな時、または降った後、空気中に充満した湿気のこと。「壓車」は、その湿気が車、または車の中の人を圧迫する意。気圧が低いことを、誇張して表現している。「人語湿る」は、人の話までが「雨氣」にぬれて、じめじめしているようなありさま。物理的には、人の話が湿気にぬれるようなことは、まずないだろうから、これは明らかに、誇張した表現である。しかし、「人語湿る」という誇張は、また、李白の「白髪三千丈」と同じように、詩的合理性と趣を持っている。

ところで、鷗外のこの句は、あるいは、宋の陸游の「滄灘」という詩の「雨余の漁舎は、炊煙湿る」という句からヒントを得ているかも知れない。ただ、陸游の「炊煙湿る」は、写実に近い句であるのに対して、鷗外の「人語湿る」は、完全に誇張の句だと言える。詩の効果から見れば、鷗外の表現は、陸游の表現に勝るとも劣らぬ、という感じがする。

(4)借用（本歌取り）

天上麒麟時一下〔一七五〕　天上の麒麟　時に一下りし
人間復見好兒郎　人間　復た見る好き児郎

溺れかかった仲間を勇敢に救った馬場少年をほめたたえた句である。「天上の麒麟　時に一たび下る」の句は、天上界から下った麒麟、つまり神童だという意だが、唐の詩人杜牧の「贈李秀才是上公孫子（上公の孫である李秀才に贈る意）」という詩の「天上麒麟時一下　人間不独有徐陵（天上の麒麟時に一下りし、人間に独り徐陵有るのみならず）」という句を借りて、そのまま使ったものである。

古人の句を借りて使うのも、漢詩の技巧の一つで、上手に使えば、詩が生きてくる。この手法は、古くからあった。例えば、曹操の名詩「短歌行」の「呦呦と鹿鳴き、野の苹を食う。我に嘉賓有らば、瑟を鼓し、笙を吹かん。」は、『詩経』小雅の「鹿鳴」の冒頭の四句を、そのまま使ったものである。

(5)詩化

鷗外の漢詩には、地名が数多く取り入れられている。日本や中国の地名だけでなく、ヨーロッパの地名なども、たくさん登場する。これらの地名の多くは、詩語としてふさわしいように、鷗外によって選択されたり改造されたりしたものである。彼は、中国の法則を守りながら、字数、音韻が詩語にふさわしく、イメージとしても美しく感じさせるようにしたのである。というのは、ほとんどの地名は、もとのままでは、詩に入りにくく、無理をして取り入れたら、詩情をこわしてしまう恐れがあるからである。こうした地名への選択や改造のことを、私は詩化と言いたい。

◎中国――禹城。
◎独逸――徳州。中国語では徳国という。
◎北海道――北溟天。
◎西日本――西藩。
◎九州――九国。
◎仙台――青葉城。
◎新潟――新斥。小揚州。
◎信濃川――信江。
◎浅間山――朝隈。
◎佐渡島――佐州。
◎二重峠――双重。
◎横浜港――横湾。
◎函館港――函湾。
◎ホーヘンシュワンガウ城――鵠山城。
◎ウルム湖――烏湖。
◎ミュンヘン――僧都。
◎ベルリン――落羽城。
◎丘陵地帯の葡萄畑――酒山。（これなどは、まったくNHKの連想ゲームみたいである。）
◎紅海とアラブ海のアデンを結ぶバブエルマンデブ海峡――涙門。

◎スマトラ――蘇門。中国語では蘇門答腊という。
◎コロンボ――月国。

右の詩化した地名は、すべて鷗外が改造したものだというわけではない。一部に、中国または日本の漢詩人の使ったものもあれば、「青葉城」など、もとの地名もある。こうした地名は、彼の詩を読解する筆者に、ときどき謎みたいな難題をもたらしたものである。

(6)詩眼（字眼）

詩は、まず言葉の芸術である。漢詩も、例外ではない。古来、有名な漢詩人ほど、詩語の選択に凝った。詩聖と呼ばれる杜甫は、みずから「語不驚人死不休（語　人を驚かさずば、死すとも休めず）」と、作詩の姿勢を語っている。一語、一字の用い方が巧みであることによって、詩句、はては詩全体が、生きてくる。それは、あたかも肖像画に眼を入れるようなものなので、これを、「詩眼」という。推敲という言葉にまつわる話は、その良い例である。唐の苦吟詩人賈島の故事だが、「推す」が良いか、それとも「敲く」の方が良いか、驢馬の背中で詩語の選択を考えながら道を進んでいくと、同時代の詩人で、官吏でもある韓愈の行列にぶつかった。そして韓愈のアドバイスで、最終的には「敲く」に決めたという。賈島の詩句は、次のとおりである。

鳥宿池邊樹　　鳥は宿る池辺の樹
僧敲月下門　　僧は敲く月下の門

韓愈が、なぜ「推す」より、「敲く」の方が良いとしたのか、その理由は、よくわからないが、あるいは、月夜の静けさと、寺の門を敲く音とのコントラストの妙を考慮したからだろうか。それは、芭蕉の名句「閑さや岩にしみ入る蟬の声」の場合と同じだと思う。つまり、蟬の声があるからこそ、山の中の静けさが、いっそう身にしみて感じられるのである。

字眼のもう一つの良い例として、宋・王安石「船を瓜洲に泊す」という詩の中の句を挙げることができる。

春風又綠江南岸　　春風又江南の岸を緑にす
明月何時照我還　　明月何れの時か我の還るを照らさん

「緑」という字が、字眼である。「緑にす」で詩全体が生きてくる。

ところで、鷗外も、字や言葉の使い方に、たいへん注意し、工夫をこらした。彼の詩にも字眼がたくさんある。例を見てみよう。

◎東天一道冷先生　　東天に一道の冷　先ず生じ
◎半宵掬此月華清〔三七〕　　半宵に此に掬わん　月華の清を

同じ『後北游日乗』に見える詩句で、月が東の空から出はじめたときの様子を描いている。

ところが、鷗外は、赤、白、灰色などの色感を使わずに、月の光りに対する詩人の感覚で、冷たいという語で月を表現しているのである。これを、中国文学では、通感という。この「冷」という字は、字眼だと言えよう。第二句には、月の光りを清らかな水にたとえて、「掬」という字が使われている。これはあるいは「月光如水（月光、水の如し）」という中国の表現からヒントを得たものかも知れないが、やはり字眼だと思う。

これまで鷗外漢詩の六つの技巧について述べて来た。もちろん、鷗外漢詩に使われている技巧が、この六つだけだという意味ではない。又、作詩には、この六つの技巧が使いこなせれば良いという意味でもない。あくまで技巧に関する例を挙げたにすぎないのだが、この六つからだけでも、鷗外が漢詩の技巧に長じていることが窺えたかと思う。

＊　＊　＊

第三に、鷗外は、漢詩のもつ思想的パターンを熟知し、それを自分の詩に使っていると言いたい。

漢詩には、一部、ほぼ固定した思想的パターンがある。例えば、秋といえば、すぐ悲秋、つまり悲しみの秋を連想することが、一つの例である。漢詩のこのような思想的パターンも、また鷗外漢詩に投影している。

(1)人生短し、したがって時をうつさず行楽すべしという思想

このような思想を詠じた中国の詩人と詩句は、枚挙にいとまがない。例えば、曹操の「短歌行」は、冒頭からそれを歌っている。

對酒當歌　酒に対して当に歌うべし、
人生幾何　人生　幾何ぞ。
譬如朝露　譬えば朝露の如し、
去日苦多　去る日は苦だ多し。

曹操は、人生を朝露にたとえているが、詩人によっては、また、人生を、朝の霜、流れる水、目の前をよこぎる鳥、「世に寄するが如し」「夢の若し」などとたとえている。短い人生について、李白は、「行楽　須らく春に及ぶべし」「人生　意を得なば、須らく歓を尽すべし」と歌っている。李白のこうした詩句の影響を受けたからだろうか。鷗外の詩にも次のような句が見える。

少壮幾時須行樂　少壮幾時ぞ　須らく行楽すべし
今夜倚樓又聽歌（二八）　今夜　楼に倚りて　また歌を聴く

(2)傷春と悲秋、つまり春を傷み、秋を悲しむという思想

四季の移り変りへの人々の気持は、本来、いろいろあるはず

だ。例えば、同じ春に対して、それを傷む人もいれば、それを喜ぶ人もいるだろう。秋も、又同じである。寂しい、悲しい季節だと思う人もいるだろうが、逆に秋は、収穫物を取り入れるときだから、喜びの季節だと考える人もいるにちがいない。ところが、中国古代の詩歌では、春をいたみ、秋を悲しむことが、春と秋に関する詩の主たる主題となっており、一種の思想的パターンとなっている。鷗外の漢詩も、明らかにこのような思想的パターンの影響を受けている。例えば、

◎満目寒烟秋色悲〔九〕　満目の寒煙　秋色　悲し
◎秋風凄然易斷腸〔四六〕　秋風　凄然として　腸を断ち易し
◎幾日傷春又酒仙〔一七九〕　幾日　春を傷み　又酒仙ならん

右は二首の詩から、それぞれ、関係の句を取って来たものである。

ところで、詩人が、秋を、悲しい季節としてとらえ、歌うようになったのは、『楚辞』以後のことである。『楚辞』の主な作者の一人である屈原は、「九章」で「秋風の客を動かすを悲しむ」と詠じ、屈原の弟子の宋玉も「九辯」で「悲しい哉　秋の気為るや」と詠じている。しかし、春を傷む句が誰に始まるかは、さだかではない。

(3)大中華思想

中国には、昔、大中華思想と大漢族主義があった。それには、二とおりの意味があると思う。一つは、中国を正統だと見なし、他の国々を蛮夷だと見なすもの。二つは、同じ中国の中でも、文明発祥地の中原（黄河流域）を正統だと見なし、他の地域、例えば南方の揚子江流域を蛮夷だと見なすもの。具体的には、東夷、西戎、南蛮、北狄という。また、瘴、荒、胡などの語も使われた。

こうした大中華思想的語彙を、鷗外も無意識裏に使用している。

①南去青森瘴霧昏〔四五〕　南のかた　青森を去るに　瘴霧　昏し
②却憐多少天兵骨　却って憐む　多少の天兵の骨
　埋在蠻烟瘴霧間〔七〇〕　埋もれて蛮煙瘴霧の間に在るを
③蠻語啾々賣彩禽〔八一〕　蛮語　啾々　彩禽を売る
④聞說蠻烟埋水鄉〔八〇〕　聞説く　蛮煙　水郷を埋むと
⑤放歌昨夜入胡笳〔一二九〕　放歌　昨夜　胡笳に入る
⑥南荒歎我久淹留〔一五二〕　南荒に我　久しく淹留するを歎く
⑦群胡遠至自西洋〔一五九〕　群胡　遠く　西洋より至る

右は、七首の詩から引用した七つの例だが、◎印を付した語が指す地名などは、つぎのとおりである。①青森（岩手地方に近い所）、②台湾、③マレー語、④シンガポール、⑤北海道、⑥台湾、⑦ロシヤ人。

右の例からもわかるように、鷗外は、日本以外の国、また首都東京以外の地域を、差別用語の「瘴・蛮・胡・荒」で形容した。彼が大中華思想の影響を受けていることは、明らかであるが、しかし、正確にいえば、鷗外の漢詩に現われているのは、大中華思想の言語表現を借りた大日本思想なのである。

(4)対の思想

対を好むのは、中国文化の特徴の一つだと言えるかも知れない。古代の建築、図画、装飾などが、対称の美を基調にしているだけではない。古代の哲学、思想なども、又、併立相対的な対を重んじる。それによれば、乾坤・陰陽、是非、善悪、強弱、成敗、天地、男女、老若など、いずれも、対の範疇に属するものである。

漢詩は、対を重要視する。したがって漢詩は、言葉や音韻の芸術であるばかりでなく、対表現の芸術である、と言ってもさしつかえないだろう。特に律詩の場合は、第二、三聯、つまり第三、四句と第五、六句に、それぞれ対の句を構成しなければならない。鷗外は、律詩を作ることに長じたが、彼の律詩には、対の句を必要とするところに、全部りっぱな対の句が宛てられている。一つ例をみてみよう。

陽熙加卉木　　陽熙　卉木に加わり
風化及禽魚（一六四）　　風化　禽魚に及ぶ

大正天皇をたたえた詩句である。「陽熙」（自然の太陽の光り）の天皇のたとえに対して、「風化」（人為的教化）。「卉木」（植物としての草木）に対して、動物の「禽魚」。立派な対を成している。

漢文化の特徴としての対の大切さを熟知する鷗外は、彼の漢詩に、ふんだんに対の詩語を生かしている。

英雄――美人　　裙釵――丈夫
柳条――松樹　　別前――別後
新声――旧曲　　入地――昇天
紅顔――白首　　蒼龍――赤鳳

(5)狂の思想

漢詩における「狂」は、気が狂うというより、常軌を逸したり、俗界からはみだしたりして、世間一般の人の常識では判断できないという意味である。主として、才能にめぐまれた人が、古いしきたりにとらわれず、自由奔放な思想を持ったり、生活したりすることをいう。したがって、世間知らず、うぬぼれるといったようなマイナス面もあることはある。しかし、鷗外は、むしろ誇るべきこととして、「狂」を使う場合が多い。中国古代の詩人たちは、よくみずからを、狂客・狂夫・狂生と言ったりした。例えば、明の高青邱が、「青邱子」という詩で「傍人識らず　笑い且つ軽んず。謂う　是れ魯の迂儒ぞ、楚の狂生ぞと」と歌っているのがそれである。

狂名到處任人傳〔五六〕　狂名は到る処　人の伝うるに任す

『後北游日乗』の、新潟を立つ前に詠じた句であるが、ここの「狂名」は、歓楽街で自由奔放な生活をして、評判になったという意だろう。

別有狂客森其姓　別に狂客有りて　森を其の姓とし
玉樹叢中着蒹葭〔一二九〕　玉樹叢中　蒹葭を着けたり

ドイツ留学を終えて、帰国する途中に作った「日東の七客の歌」の詩句である。ここで鷗外は、みずからを「狂客」と呼んでいるが、それは自負をこめた反語的用法で、単に「世間知らず」というぐらいの意味である。しかし、中国での「狂客」が持つ価値を熟知したものがある。

(6)旅愁の思想

今、日本では、毎年千数百万人の人が外国へ旅行しているようである。鷗外が、一八八四年、フランスの客船でドイツに留学に行ったころ、ほぼ五十日間もの退屈な船旅をしなければ着けなかったヨーロッパも現在では、一日で行けるようになった。日本国内の短距離の旅なら、多くの日本人にとっては、すでに日常茶飯事になっている。ともあれ、現代の旅は楽しいものとなった。そのかわり、もはや旅愁を味わうことは、ほとんどなくなってしまったのである。

しかし、昔、家を離れて旅をすることは、楽しみがあるとともに、愁いや苦しみを伴うものでもあった。家を離れることによって生じる精神的な苦しみのほか、交通など物質的な困苦が多かったことにもよろう。そのせいか、旅に苦しみと愁いは、いつも付き物であった。中国古代詩人の、旅の苦しみや旅愁を詠じた詩句は、枚挙にいとまがない。たとえば、李白が「蜀の道の難きことは、青天に上るより難し」とうたって、四川への旅の困難さを比喩的に誇張して表現している。李白の「蜀の道は難し」という詩の制作意図に関しては、いろんな説があるようだが、ここでは触れないことにする。大詩人であるとともに、大旅行家でもあった彼は、馬や舟などの交通道具も、もちろん利用したが、主として自分の二本の足で中国の名山大河を旅した。李白のこの詩句は、山国四川への旅の困難なことを、実感をこめて嘆いたものである。

要するに、旅愁の感懐をうたうことも、また漢詩というジャンルのパターンの一つだが、それも、鷗外の漢詩に大きな影をおとしている。筆者の数えたところでは、旅愁を詠じた詩句は、彼の詩に十四例あるし、関係の詩語として、離愁、離恨、羈愁、暗愁、聞叫猿などが挙げられる。ここでは代表的例を、一つ挙げるにとどめたい。

回首故山雲路遙　首を回せば　故山は雲路　遥かなり
四旬舟裏歎無聊　四旬　舟裏　無聊を歎ず

今宵馬塞港頭雨　洗盡征人愁緒饒〔九八〕

今宵　馬塞　港頭の雨
洗い尽す　征人の愁緒の饒きを

これは、ドイツ留学の旅、船でフランスのマルセイユ港に着いたときに作った七絶である。第一句は、旅の道のりの遠いことをいう。第二句は、「四旬」という時間の長いことを嘆く。「四旬」は、四十日間であるが、実際は、八月二十三日から、作詩の十一月七日まで、合わせて四十五日間であった。第三句、夕方マルセイユ港に着いたときは、ちょうど雨だった。第四句、その雨は、私たち旅人たちの旅愁を、きれいに洗いながしてくれた、という内容である。その中には、道中の苦労への回想もあれば、故郷をなつかしむ郷愁もあったに違いない。これこそ、典型的な旅愁であろう。

以上、漢詩における六つの思想的パターンが、鷗外漢詩にどう投影しているかについて述べた。

いうまでもなく、上に述べたような思想的パターンは、長い歴史をもつ漢文化・漢文学の中で形づくられたものである。こうした中国文化の精髄、または大中華思想のような、中国の詩人こそ持つべき思想的パターンが、鷗外漢詩の栄養となっていることは、漢文化・漢文学に対する彼の造詣の深さを示すものとして評価していいだろう。

注

(1) 〔四〇〕は拙著『森鷗外の漢詩（上・下）』（明治書院、一九九三年六月）の詩の番号、参考までに記しておいた。以下は同じ。

(2) 森潤三郎『鷗外森林太郎』（森北出版株式会社、一九八三年九月覆刻版）九九頁。

(3) 奥野信太郎「鷗外における中国文学の位置」（有精堂『森鷗外Ⅰ』昭和五六年　六版）による。